不幸のガム

Ｉｆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸のガム

【Ｎコード】

Ｎ５６５２Ｆ

【作者名】

Ｉｆ

【あらすじ】

――ねえ、知ってる？――もしかして、「不幸のガム」？最近まことしやかに囁かれるようになった都市伝説、「不幸のガム」泰輔は最初馬鹿馬鹿しいと相手にしなかったが、彼はそのガムを食べてしまったとき、人生は地獄のどん底へと堕ちた。

（前書き）

初めての執筆依頼の作品です。とはいえ、ホラーものを初めて書いたものですから、恐怖が相手に伝わるかどうかは分かりません。ですが、どうぞ最後まで読んでみてください。感想いただけたら幸いです。

――――ねえ、知ってる？

――――もしかして、「不幸のガム」？

ゴトゴトと揺れる電車の車内で、女子高生の話を聞きながら泰輔はバカらしいと思った。

今、巷で話題となっている都市伝説「不幸のガム」。それは謎の人物「ケイ」の持つガムを所持したり噛んだりすると不幸な目に合うという、ごくありきたりな都市伝説である。

――――ウチのクラスの――君、「ケイ」から貰ったガム噛んだ後に彼女の――ちゃんと大
喧嘩したらしいわよ。

――――マジで！？　チョーヒサンじゃん……。

――――だけど――君、いつ、誰から貰ったガムか全然分からないんだって……。

彼女達のしている話は、どう考えてもガムの所為ではない気がするのだが、そうと信じているのならば別に口を挟む道理もないだろう。

（平和な世界になったものだな……）

泰輔は人事のようにそう思い、音楽を聴こうと胸ポケットからmp3プレーヤーを取り出した。

――――ポトリ。

小さな音を立て、一枚の板ガムが彼の膝元に落ちる。どうやらプレーヤーを取り出す時に胸ポケットに入っていたのが一緒に落ちてきたようだ。それにしても、

（俺、こんな所にガム入れたっけな……？）

泰輔はふとそう思いながら思わず胸ポケットを触る。しかし、すぐに彼にとってどうでもいいこととなり、イヤホンを耳に当てながらお気に入りの歌手の曲を流す。

そして、ついでとばかりに泰輔は「ガム」を口の中に放り込んだ……。

次の日、泰輔の人生は一気にドン底に堕ちた。

先輩に怒られる。体が動かない。頭が働かない。作業に集中できない……。

一切の理由が分からなかった。昨日までは何も無かったのに。

彼はしばしの間思考する。すると、昨日の女子高生の会話がまるで白昼夢のように思い出された。

――――ねえ、知ってる？

――――もしかして、「不幸のガム」？

そして、泰輔は瞬間的に悟った。昨日胸ポケットに入っていた見覚えの無い。あれが、「不幸のガム」であると。

そして、その直後にどこからか視線を感じる。

泰輔はその視線の発信源をゆっくりと辿った。

彼と目が合った途端、全身に鳥肌が立った。

形容できない気味の悪い微笑みが泰輔の目に映った。

泰輔と彼の間に何人もいるのに、泰輔の目には彼しか映っていなかった。

そして、刹那的に彼が「ケイ」であると理解する。
それと同時に、脳が警鐘を鳴らした。

――――もう、逃げられない……。

その日、泰輔は校舎の屋上にいた。
ガムを噛んでから五日経つが、もはや呪いとも言える不幸はまだ続いていた。それどころか、日に日に酷くなっていくばかりである。
これ以上は肉体的にも、そして精神的にも耐えられない。
そう思い、彼は自殺を決意したのであった。
泰輔は屋上の端に立ち、地面を見下ろす。あまりの高さに足が竦むが、こんなのはガムの恐怖に比べればなんてことなかった。
やがて、飛び降りる決心もつき、泰輔はゆっくりとフェンスから手を離した。

その時だった。

体の落下していく感じが止まり、誰かに手を掴まれていることを泰輔は理解する。
そして、宙ぶらりんの状態から、屋上に戻される。
腰を下ろしたまま泰輔は自分を自殺から救ってくれた人を眺める。
そして、全身が震え上がった。
「……駄目じゃないか、自殺しようとしちゃ……」
言葉を発する目の前の人物、そして泰輔を助けてくれた人物は紛れもなく――

――「ケイ」だった。

「心配したんだよ……」
「ケイ」は泰輔が初めて彼に気付いた時のような不気味な笑みを

浮かべて手を差し伸べる。
声を出したくても、出せない。体も震えてしまって動かない。
「君に死んでもらったら困るんだから……」
「ケイ」は手を差し伸べたまま、ゆっくりと泰輔に近づく。
泰輔は「ケイ」から逃げるように尻餅をついたまま、ずるずると下がっていった。
「だって、君を殺すのは……」
「ケイ」が一歩踏み出すごとに、それに合わせて泰輔も一歩下がる。
そして、次の瞬間、泰輔の表情と「ケイ」の表情が急変した。
「僕なんだから！！」

――――ガシャン。

その音は、行き止まりを表していた。
そして、憎悪の表情から再び微笑みを取り戻した「ケイ」は、怯える泰輔に対して優しく囁いた。
「……じゃあね」

泰輔が最後に見た彼の表情は、この世の終わりそのものだった。
そして数瞬後、彼の意識は永遠に戻ることが出来なくなった。

ある学校で生徒が屋上から飛び降り自殺したという。しかし、その生徒は顔も生前の判別がつかないほど酷くなっていた。そして所持品もボロボロになった財布だけであり、その中から出てきた保険証からかろうじて「泰輔」という名前が確認できた。
しかし、その学校には「泰輔」という名の生徒は在籍していなく、警察は現在捜査中である。
なお、彼の死後、「不幸のガム」の噂がぴったりと止んだことから、彼が「ケイ」ではないかと世間では噂されている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5652f/

不幸のガム

2010年11月17日10時28分発行